



TITLE:

# 京大上海センターニュースレター 第229号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第229号. 京大上海センターニュースレター 2008, 229

ISSUE DATE:

2008-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65899>

RIGHT:

---

# 京大上海センターニュースレター

第 229 号 2008 年 9 月 1 日

京都大学経済学研究科上海センター

---

## 目次

最近の北京から : オリンピックはまだ終わらない

必読! 「チベット暴動脱出記」(下)

+++++

## 最近の北京から

### ～ オリンピックはまだ終わらない～

協力会会員 北京在住 小林治平

北京オリンピックが終わった、と前回書いたが、当地のTVではまだその「回顧」的なシリーズを連続してやっていたり、メダル獲得迄の選手の訓練の紹介、外国の選手の帰国後の歓迎の様子、そして開会式の再放送などが放映されている。パラリンピックがまもなく始まる事や、目下その聖火の国内リレー実施中でもあり、普段と違う生活は9月下旬まで続く。そんな訳で最終的に日常の生活が戻ってくるのは10月の国慶節の休み明けになるようである。緊張感を維持しつつあと一ヶ月過ぎすのはいささが気が重い。

街の「首都治安志願者」も相変わらず街角に立っている。今日、外出の際に見かけた年配の男性にちょっと話しかけて訊いてみたところ、オリンピックが終わったので一人で立つ事になった(以前は3人程度一緒であった)由。いくらか手当ては出るのか尋ねたが全く出ないと言う。純粋なボランティアのようである。私は僅かでも謝礼程度のものをもらうのではないかと思っていたので意外であった。ただ志願者がとても多いので一週間に一度位立てばよく、負担にはならないそうである。このボランティア精神が今後のよい社会づくりに活かされる事を願う。

北京在住の日本人として嬉しい話題はシンクロナイズドスイミングのコーチ井村雅代氏である。井村氏は今や「シンクロ教えの母」(中国語:花游教母)と呼ばれている。この呼称で新聞やTVで報道されている。

私の見た8月26日夜7時(当地時間)のCCTV「新聞聯播」は井村氏と米国女子バレーボールチームの監督(「教練」)の郎平氏(ろうへい; 元中国女子バレーボールチームのエースアタッカー)を並べて「オリンピック精神の発揚に貢献した」として賞賛していた。

日本または日本人が、中国の大衆から異論なく感謝、評価がなされる話題はそう多くないので、当地の在留邦人に安心感を与えるありがたい存在である。気になるのは日本国内での井村氏に対する評価がどうかという事である。

報道によると中国が今回選手の指導のために招聘した外国人は38人に上ったそうである。メダル獲得で有名になった人にはフェンシングのフランス人コーチ、テコンドーとホッケーの韓国人コーチがいる。

多数の外国人コーチの招聘は、ホスト国(「東道主」)の中国としてはやはりメダル獲得という「結果」をどうしても出したかったと言うことだろう。その心情・気持ちはよくわかる(国威発揚のため(「為国家争光」)と言ういい方をTVに登場する多くの人がするのを何度か聞いた)。

ところで、今回私は全く初めて知ったのだが、本来のオリンピックは国別の対抗戦ではなく、個人と個人の競争である事が定められており、掲揚される旗も「国旗」ではなく、演奏される歌も「国歌」ではないのだという。たまたま、多くの90数パーセントの国の選手団が国旗と国歌をオリンピックでの団旗と団歌として登録しているに過ぎないとの解釈らしい。

(中華台北という名称で参加する台湾の団旗が青天白日旗でないのはこの規定からのみという何ら不思議ではない

のであろう)

しかし、場内アナウンスでは「国旗の掲揚」や「国歌の演奏」と言っている(仏語・英語・中国語の順;但し仏語はわからないが)のが放送でも聞こえるし、日本国内で見るNHKの放送も国歌、国旗の掲揚と言っていると聞く。また、日本と中華台北の野球の試合をNHKラジオ(国際放送)で聞いたがアナウンサーは「台湾」と言い、中華台北という「長い」呼称=選手団名、は使っていなかった。

また、開会式の入場行進では選手のカメラの類は持込禁止というような、結構細かい事も同憲章決められている。

しかし実際は守られていなかった事(日本選手団は守っていた)はご承知の通り。

このあたり、クーベルタン男爵の理想の流れとも思える精神が、現実の大会の運営の影に回ってしまって、我々一般の観衆のよく見えない、理解できない存在になりかけているのは残念な気もする。

いつかある日、中国が再びオリンピックの主催国となる日があつたら、国威発揚は今回十分すぎるほどした・出来たので、次回は本来のオリンピック精神の発揚に注力をお願いしたいと思う。(8月31日記)

『環球時報』08年8月23日 「日媒称中日花游實力接近」

同 上 08年8月24日 「日本花游教母回報中国信任」

NHK国際放送 08年8月24日

'Chinese Olympic Team leader thanks foreign coaches'

オリンピックについて、オリンピック憲章

<http://www.joc.or.jp/olympic/charter/chapter5/69.html>

<http://www.joc.or.jp/olympic/charter/chapter5/70.html>

+++++

## 必読!「チベット暴動脱出記」(下)

26.AUG.08

香港:美朋有限公司 董事長 小島正憲

### 2.私の見たチベット暴動の実態 (8/14~18:現地取材)

- ・ 3/10、「チベット青年会議」のよびかけに応じた抗議行動が起きるといふ情報が、街中を駆け巡っていた。政府はレブン寺やセラ寺などの拠点を封鎖し、抗議行動を事前に封じ込めようとした。しかし一般のチベット族の間には不穏な空気が流れており、漢族商店で物を買っても代金を払わない、あるいは漢族のタクシーに乗っても料金を払わないなど、横着なチベット族の態度が目につくようになっていた。
- ・ 3/14、暴動は、ラサ市内の繁華街の北京東路(西は康昂東路から、東は林聚路までの約3km)を中心にして、それに交わる娘夏南路、梟森格路北・南段、小昭寺路、林廊東路、大昭寺周辺の八廓街などの広範囲で同時多発的に起きた。
- ・ 暴動参加者はチベット族およびラマ教僧侶を含め、3000~4000人規模であった。
- ・ 政府公安関係の建物の破壊は、小昭寺路に入るところの公安警察派出所、梟森格路北段近くの共青团ラサ市委員会などであり、その他の政府系建物の被害は比較的少なかった。
- ・ 漢族経営の銀行や一般商店などの被害は甚大であり、建物が各所で略奪・破壊・放火された。ことに中国建設銀行や農業銀行の各支店、金銀宝石販売店、携帯電話販売店、高級洋服店などが大規模な略奪・放火にあっており、その痕跡がはっきりと残っていた。約1300店が略奪・破壊され、そのうち約100店が放火されたという。
- ・ チベット族経営の商店は、チベット族であるという目印として店先に白いショール(チベット族がお祈りの時に使うもの)や、主食のツアンパを置いていたという。それでも漢族経営の店だけでなく、チベット族経営の店も被害にあった。たとえば建物の両側に漢族経営の喫茶店があり、その真ん中にあったチベット族経営の油売り商店は巻き添えをくって類焼・全壊していた。2階建てで、1階で漢族が商店を営んでいて2階にチベット族が住んでいた建物では、1階の漢族経営の商店が焼打ちされたので、2階のチベット族住人が逃げ遅れて焼死したといわれている。
- ・ 3時ごろからチベット族の不満分子や不逞の輩のような連中が暴徒化し、漢族をみつけ、手当たりしだいに殴ったという。このとき大木宗さんを含む日本人や欧米人の観光客までも巻き込まれ、暴行を受けた。
- ・ 放火や暴行の結果、漢族の死亡者が出たのは事実であるが、その人数は明確ではない。瀕死の重傷を負った漢族も多く、いまだに病院に入院している人もあり、植物人間状態の人もいる。
- ・ 巻き添えを食って死亡したチベット族の人数や、暴動後、武装警察に殴り殺されたり拘束されたチベット族の人数も定

かではない。

- ・ 大昭寺周辺の露店の商人たちの間でも小競り合いがあり、漢族の商店主が隣のチベット族商店主に殴りかけられ、すべての商品を置き放しにして逃げた。双方共に、前日まで隣通しで平穏に商売していた仲だったという。
  - ・ 3 / 14 夕刻から未明にかけて、人民解放軍と武装警察が出動し、暴動鎮圧に入った。小昭寺路だけでも南北端に戦車3台ずつ計6台が置かれ、なおかつ北京東路を数台走行していた。戦車だけでも10数台が出動し、鎮圧に当たっていたことになる。3 / 15 正午ごろには事態が収まり、戦車を含め軍は表面からその姿を消し、その後の鎮圧は武装警察と地元人民警察の手に委ねられた。なお現在(8 / 15)でも市内にナンバーを隠した軍用トラックが兵士を乗せて駐屯地に入出入りしていた。約1万人が待機しているという。
  - ・ 当初、武装警察の鎮圧方法はそんなにひどくなかったという。ところが途中で武装警察の中隊長がチベット族に殺されたので、武装警察側の報復意識が過剰となり、過酷な弾圧にエスカレートしていったという。武装警察はチベット族をみつけると尋問し、身元証明ができない者を片端から殴りつけ、半殺しにしてトラックに積み込み、どこかに連れ去ったという。
  - ・ あまりの過酷な弾圧に、人民警察のチベット族の局長が漢族の副局長を通じて、その手加減を要求したところ、その副局長まで武装警察から殴られたという。それ以降、人民警察は完全に武装警察の支配下に置かれたという。
  - ・ 漢族の中にも、街中でうろろしていて武装警察に殴られた人がかなりいるという。
  - ・ 3 / 15 中に、政府当局によって、ラサ市内の外国人観光客やジャーナリストたちは、全員、チベット自治区から強制退去させられた。
  - ・ 3 / 15 以降、暴動区域のすべてが外出禁止とされた。それは10日間ほどに渡り、一般住民も食料などの手配に苦しんだという。反面、チベット族でも、身元証明ができる者は比較的自由だったという情報もある。
  - ・ 現在(8 / 15)は、2万人の武装警察が投入されており、暴動区域は完全に制圧されていた。1万人は自動小銃を持ち完全武装で6人が一組で市内を常時巡回し、各交差点にはすべて検問所が配置され数名の武装警察官が睨みをきかせていた。さらに1万人が私服で市内警備に当たっているという。この状況は、ラサ市内がいわば漢族の占領地域と化しているようであった。
  - ・ 地元人民警察も2～5人ぐらいの単位で、すべての区域で常時巡回していた。
  - ・ ラマ教僧侶の根拠地とされたセウ寺は数日前から観光解禁になったが、事前の申請がなければ入ることはできない状況だった。現在、僧侶は教育中ということだった。レブン寺は、現在(8 / 15)でも、一般観光は禁止だった。
  - ・ 漢族もチベット族も、経済的に大きな被害を受け、ともに今回の暴動を迷惑なことだと思っている。観光客は激減し、ある土産物屋店主の話では3年分の儲けがなくなったという。
  - ・ ホテルなども、例年ならば超満員のシーズンなのに、どこも閑古鳥が鳴いている始末だった。
  - ・ 現在でも漢族タクシー運転手は夜間の営業を避け、チベット族運転手に交代してもらっているという。
  - ・ 取材中、漢族は饒舌だったが、チベット族は一樣に口が重かった。
- 上記の多くの現場を、証拠写真としてデジカメに収めてきたが、被写体として入っている人たちに迷惑が及ぶことを考え、掲載は割愛させていただいた。

### 3. 暴力の拡大連鎖

2008年3月14・15日にチベット自治区・ラサ市内で起きたチベット族の暴動は、**暴動レベル5以上**であったと判断する。その断定の根拠は、チベット族の漢族への暴行および漢族商店などへの略奪放火、それに対する人民解放軍・武装警察・人民警察の苛烈な弾圧、漢族・チベット族・武装警察・人民警察に相当数の死傷者が出ている という厳然たる事実である。

今回の暴動の主たる面は、チベット族の漢族に対する暴行・略奪・破壊・放火である。その点で、今回の暴動が、中国政府のチベット族への人権弾圧が主たる側面であると主張する国際人権派の主張はまったく的外れである。今回の暴動は、きっかけが高度な自治要求や人権弾圧への反対であったかもしれないが、実態が略奪・暴行目的のチベット族の行動に帰着してしまったことは明白である。まず国際人権派は、結果としてチベット族がこのような事態を引き起こしたこと、自らがその事実を誤認したことに対して、深い反省の弁を述べるべきである。私はチベット族の正当な抗議行動ならば認めることができるが、略奪・暴行などの乱暴狼藉は絶対に認めることはできない。

今回のチベット暴動は、見事なまでに誤解に基づく暴力の拡大連鎖を見せた。そのことは、この一連の事態を、以下のように示せばはっきりわかる。

3 / 14 : チベット暴動勃発。チベット族の漢族への不満の爆発が、略奪・暴行・放火行為に発展。

3 / 15 : 中国政府の弾圧開始。軍・武装警察・人民警察による過酷な弾圧。

人権派の五輪聖火リレー妨害開始。チベット独立派や国際人権派の事態の誤解に基づく行動。



全世界での中国人の愛国運動に発展。五輪妨害への中国人の愛国心が異常に高揚。

全世界での中国人への反発。他国での中国人の傍若無人な振る舞いに対する反感、反中意識の拡大。

チベット独立支持派や国際人権派が、3 / 14の事態が当初の自分たちの意図とはかけ離れた暴動に発展したについて、すぐに謝罪し事態の沈静化に努め、チベット族に正常な抗議行動に戻るよう呼びかけていれば、その後の異常な展開はなかったであろう。またそのときそのような行動を取っていれば、中国政府の過酷な弾圧も防げたであろうし、この残虐行為への抗議が正当性を持つことができたにちがいない。

しかしながらチベット独立派や国際人権派は、今回の暴動の実態を中国政府のチベット族への人権弾圧としてのみ捉え、チベット族による略奪・暴行・破壊・放火という徹然たる事実を無視した。そしてチベット族への中国政府の弾圧行為のみを声高に糾弾し、五輪聖火リレーへの妨害という非常手段に打って出た。

この行為が中国人の愛国心に火をつけ、全世界での五輪聖火リレーの擁護運動に発展した。ことに日本の長野と韓国のソウルでは、中国人留学生たちがその地を中国国旗の五星紅旗で埋め尽くし、あたかも占領したかのように傍若無人に振舞い、日本人や韓国人の反中意識をかきたててしまった。私は長野とソウルの両現場で、それに立ち会ったので、その異様な事態をはっきり語ることができる。現地に参加していたチベット独立派や国際人権派は、チベットで起きた暴動がチベット族の略奪・暴行・破壊・放火行為であったことを知っているものは皆無であり、ただ「フリーチベット」連呼し、雪山獅子旗を振るのみであった。かたや中国人留学生たちはラサで過酷な弾圧があったことを無視し、圧倒的多数を背景にして、大きな五星紅旗を振り回し、「チベットは中国の領土である」と大声で叫び、五輪聖火リレーを「中国加油」の掛け声で守り抜くことに専心していた。

この光景をテレビで見たほとんどの日本人が、長野市内をあたかも自分の国の庭であるかのように傍若無人に振舞う中国人留学生たちの行動に眉をひそめた。さらに反中派や嫌中派の論客たちがこの感情に便乗して、こぞって中国人留学生の蛮行を声高に主張し、中には中国が大国化すれば日本が呑み込まれ、日本の国中に五星紅旗が乱立すると叫ぶものさえ出た。これらの論調は、多くの一般日本人の反中意識を拡大させた。

このような暴力の拡大連鎖ともいべき事態は、冷静に事態をみつめて対処していれば、防げたはずである。並み居るジャーナリストや中国ウオッチャーたちの誤った報道姿勢や解説が、事態をより複雑にし、大混乱させたのである。多くの関係諸氏に猛省を促したい。とにかく先入観を持たず、事態の本質を冷静に見ていれば、これらの馬鹿げた暴力の拡大連鎖は防げたのである。

もちろん私は今回の暴動の根源には、民族問題があることを否定するものではない。チベット独立派や国際人権派は過去の民族弾圧の歴史的経緯を持ち出して、今回のチベット族の行動を正当化しようとしている。しかしながら、そのような視点だけでは今回の暴動を分析するには不十分である。その点で大西広教授は「チベット問題とは何か」(かがわ出版刊)で、民族問題が階級問題に転化しており、漢族の経営者対チベット族の労働者という構図ができあがっており、そこに大きな要因があると指摘され、チベット民族問題の早期の解決にはチベット族経営者を育てることが急務であると主張されている。これは卓見である。ぜひ前掲書をお読みいただきたい。なお大西教授は民族問題の学術研究書を近年中に出版される予定である。

大西教授の論旨は、チベット民族問題を経済という土台から解明しようとしているところに、大きな特徴がある。私もその主張は正しいと思う。それでも私は、人間が感性の動物であり、土台からだけではチベット族の行動を説明するには不十分だと感じている。その観点から私は、4 / 30の私の小論「速報: カルフルと聖火リレー」で下記のように事態を分析した。

「かつて毛沢東率いる紅軍が長征のとき、チベット族やウイグル族と激しい戦闘を行った。他の少数民族の地域は意外にすんなり通ることができたが、この地域だけは簡単ではなかった。たとえばウイグル族との戦闘では紅軍女性部隊の2000人が捕虜となり、奴隷として売り飛ばされてしまったという。チベット族との間でも同様の激戦が展開されたという。したがってその怨念から、解放後中国政府は両族を徹底して制圧したと思われる。またチベット社会自体が、開放前は農奴社会であり決して望ましい社会ではなかったという歴史を持っていた。だから中国が開放という名目で両族を制圧したことを、一方的に非難することは正しくないと思う。反面、50年代末の急激な人民公社化がチベット族に大きな損害を与え、それがチベット動乱につながり、さらなる弾圧を生んだという歴史も忘れてはならないだろう」

この小論にはただちに読者の方から、批判の声が寄せられた。批判は次の2点であった。長征で闘ったのはウイグル族ではなくて回族である、チベット族との間に激戦はなかった。確かに については、完全な私の誤りであったので、ただちに訂正した。しかしながら については、私の主張は完全に誤りではないと考えている。批判に答えるため、詳しく現地調査を開始しようとした矢先に、四川省大地震が起き、それができなくなってしまった。年内には現地調査を終え、批判に答えるつもりである。

その後、数ヶ月の間に、チベット問題を解説する書籍がたくさん出版された。そのほとんどが歴史的経緯の中からチベ

ット民族問題を解き明かそうとするものであり、大西教授のように経済的な側面からのアプローチは皆無である。また歴史的経緯を述べるにあたっても、長征時点でのチベット族と紅軍との戦いに言及しているものもまったく見当たらない。もちろん、大木崇さんのこの本のように、チベット暴動の真実の一面を伝えたものは絶無である。

以上